

「モリカラ」

morikara

東京大学演習林ニュースレター

The University of Tokyo Forests Newsletter

2026/5/10

no. 07



富士癒しの森研究所の創設 100 周年

[Topics]

「東京大学の森」育成資金を活用した事例の紹介 (1)

[教育]

全学体験ゼミナール「森のフィールドワーク入門」

[研究]

約 100 年前から続くモウソウチクの開花周期研究試験地の現在
森林生態系多様性基礎調査から明かす全国規模の森林炭素蓄積能力の実態



富士癒しの森研究所の創設 100 周年

創設 100 周年を祝う式典

2025 年 10 月 24～25 日にかけて、富士癒しの森研究所で、創設 100 周年記念行事が執り行われました。1925 年の設立以来、本研究所は富士山麓の森林を舞台に、森と人との関係を探究する教育・研究の拠点として歩みを重ねてきました。同時に、人々に安らぎを与える「癒しの森」としても親しまれ、その活動は学内外に広く発信されてきました。

24 日には記念式典が行われました。東京大学関係者や協定を結んでいる山中湖村から 68 名が参列し、100 年にわたる研究・教育活動の蓄積と社会的意義を振り返るとともに、次の時代に向けた展望が共有されました。附属演習林が担ってきた役割の大きさと、今後への期待を改めて確認する、節目にふさわしい機会となりました。

森と能楽、そして木の循環を未来へ

式典では、研究所の理念と響き合う企画として、梅若会による能、研究所スタッフやボランティア団体「癒しの森の会」会員も参加した謡が披露されました。紹介文では、富士癒しの森研究所が 100 年にわたり「森と人とのつながり」を軸に教育と研究を行ってきたこと、そして能楽が自然の移ろいと人の感情を重ね合わせ、700 年にわたり受け継がれてきた日本の伝統芸能であることが語られました。自然との共生を体現し

てきた能楽は、当研究所の理念を芸術として象徴的に表すものと位置づけられました。

当日は、平和と安寧への願いが込められた《高砂》、延命長寿と清らかさを象徴する仕舞《菊慈童》を装束にて演じ、100 年の森の歩みを寿ぐとともに、未来の平和と繁栄への祈りが表現されました。

式典終了後には、富士癒しの森研究所産材を用いて建築が進められている道具館の見学も行われました。近年ナラ枯れによって枯死したミズナラを主に活用しており、森林被害への対応と資源の有効利用を両立させる取り組みとして注目されています。森で生まれ、役目を終えた木が新たな形で生かされる姿は、演習林における教育・研究の実践そのものであり、来賓に強い印象を残しました。森と能楽、そして木の循環が響き合う一日は、富士癒しの森研究所が次の 100 年へ歩み出す象徴的な一歩となりました。

森の文化祭

翌 25 日は、記念イベントとして「森の文化祭」を実施しました。お天気には恵まれず雨が降り続きましたが、テントやタープを張って、無事にイベントを開催することができました。

会場では、地元の方々による歌や楽器の演奏、様々な展示物、そして焚き火で焼き芋や豚汁など、心温まるコンテンツが盛りだくさんで、雨にも負けず、たくさん笑顔があふれる一日となりました。



写真：富士癒しの森研究所創設 100 周年記念式典集合写真

「東京大学の森」育成資金を活用した事例の紹介(1)

「東京大学の森」育成資金は、演習林が優れた教育研究の場であり続けると同時に、「科学と社会をつなぐ森」としてさらなる充実を図るため、2009年度に設けられた基金です。演習林の森林管理に必要な人材育成、公開講座や地域連携活動の開催、演習林の森林管理に必要なさまざまな器具・装具の充実、社会と演習林を繋ぐさまざまな活動、学生実習のための宿泊施設の維持管理、自然災害からの復旧などに活用しています。基金の活用事例を2号にわたり紹介いたします。

活用事例1：古地図資料の修復（千葉演習林）

1894年に日本最初の大学演習林として設置された千葉演習林では、古い資料を多数所蔵しています。そのうち長い時間を経て損傷が激しい古地図2点の洗浄・裏打ち等の修復を行いました。修復された古地図はデジタル画像化され、ウェブ上で公開しています。

活用事例2：全木調査の作業補助（田無演習林）

田無演習林では5年毎に全木調査を実施しており、2024年度の調査で学生に胸高直径や樹高の測

定、記録作業などを補助してもらいました。13名の学生の作業時間は延べ356時間に及び、効率的で精度の高い調査ができました。学生にとっても森林調査の実務を学ぶ機会となりました。

活用事例3：下賀茂寮宿泊施設の設備・備品の更新（樹芸研究所）

客室の快適性、利便性を高めるため、20年以上経過して老朽化していた宿泊室のエアコン6台を更新（2023年度）、客室の蛍光灯の照明11台をLEDの照明へ交換（2024年度）しました。また重く扱いづらかった古い寝具を軽いものに変更して管理しやすくするため、掛け布団30枚および掛布団カバー35枚（2024年度）、毛布30枚（2025年度）の更新を行いました。



育成資金について詳しくはこちらから



古地図資料の修復（千葉演習林）



全木調査の作業補助（田無演習林）



教育

全学体験ゼミナール「森のフィールドワーク入門」

演習林では、森林でフィールドワークをする方々により良く使ってもらえるよう、日々仕事が行われています。そして演習林で働く多くの教職員もまた、フィールドワークを愛しています。学生にもぜひフィールドワークに触れて、好きになってもらいたいと、2024年度から教養学部前期課程科目として全学体験ゼミナール「森のフィールドワーク入門」が開講されています。

この講義は、千葉演習林と富士癒しの森研究所で、それぞれ1泊2日の日程で実習を行っています。講義題目にあるように、この講義は森林でのフィールドワークに関する基本的な知識を、体験を通じて学んでもらうことを目的としています。以下では、実習のプログラムを簡単に紹介します。

フィールドワークで一番大事なことは、安全に帰ってくることです。そこでまず、千葉演習林でフィールドワークの安全管理をテーマにした実習を行います。この実習では、山道を歩きながら、安全な身のこなし方や、落石や枝の跳ね返りといった危険の回避方法を解説したのち、学生たちは地図上に示された地点に到達する課題に取り組みます。また、危害をもたらす生物について解説し、ヤマビルを忌避するのに何が有効かを確かめる実験もしています。

自然相手にどう調査すればいいのか、これはなかなか難しい問題です。そこで富士癒しの森研究所では、フィールド調査を知る実習を実施します。動物の調査方法として、無線機をつけた動物の居場所を見つけ出すラジオテレメトリー調査など、植物については、一定区域内の植物の種類とサイズを記録する毎木調査などを体験したり見学したりします。植物の調査では、得られたデータを過去のデータと合わせて分析して、森林の移り変わりも考えます。

地方演習林ごとに森林の特色があります。二つの演習林に行くことは、様々な森林の姿を知る機会にもなります。学生たちにフィールドワークの魅力を感じてもらえるよう、今後もプログラムの充実に取り組んでいきます。



課題地点を探して道のない林内を進む学生

竹は数十年に一度の周期で開花する

竹は長期間、地下茎やタケノコで栄養繁殖を続けた後、数十～百年近くの周期で、一斉に開花・枯死するという特異な生活史を持っています。この現象は古くから知られており、なぜ竹は開花までこれほど長く待つのか、という論文も報告されています。この論文では世界の竹類 41 種について文献の記録から開花までの年数がまとめられており、竹の種類によって開花周期が異なることが示唆されています。しかし、これらの開花年数は文献に基づく推定値です。正確な開花周期を確かめるには、実際に竹を植えて長期間育て、いつ開花するのかを観察することが確実です。

300 年計画のモウソウチク開花周期実証試験

実際に、開花周期を調べるための植栽試験が、約 100 年前から日本で実施されてきました。その一つが、東京大学千葉演習林にあるモウソウチク開花周期実証試験地です（図 1）。この試験は神奈川県山林会の近野英吉博士が提案したことに始まります。その提案に協力したのが当時の東京帝国大学演習林長・蘭部一郎博士でした。近野博士は、1～2 回の開花を確認した程度では確実な周期性とはいえないと考え、1 世代を約 100 年とみなして 3 世代を確認できるように、300 年にわたる長期試験を計画しました。そして、後世まで試験の意図が引き継がれるようにと、試験地内に説明文を刻んだ石標が設置されました（図 1a, b）。

このような長期の実験は、研究者一人では

成し遂げることができません。組織として調査地を管理し、知見を積み重ねていける大学演習林のような環境を活かした研究プロジェクトの一つといえるでしょう。

各地の 1 世代目のモウソウチクは 67 年目に開花した

この試験地のモウソウチクは、元々は現在の横浜市保土ヶ谷区の民家に植栽された竹林の 1 株が、1930 年に開花・結実したものが由来です（図 2）。現地で種子から発芽した芽生え（実生）を採取し、3 年間の養苗の後、1934 年に千葉演習林に実生 2 株が植栽されました。この時、同時に千葉演習林の実生の兄弟にあたる実生たちが、東京大学田無演習林、森林総合研究所、京都大学上賀茂試験地等に植栽されました。そして、千葉演習林の実生を含むそれらのほとんどが 1997 年、すなわち発芽から 67 年目に開花しました（図 1c）。

現在も各地に受け継がれる 2 世代目のモウソウチク

千葉演習林の試験地では、1997 年の開花後に落下した種子が発芽し、現在は 2 世代目の実生が生育しています（図 1d）。67 年という開花周期が確かであれば、次の開花は 2064 年になると予測されます。今後も千葉演習林では獣害対策の柵の維持や適切な間伐等を行って試験地を管理していく予定です。

では、兄弟たちの試験地は現在どのような状況なのでしょうか。私たちは、試験地の経緯や栽培記録を文献や聞き取り調査によって整理し、それらの情報を基に各地の植栽場所を実際に訪れて調べました¹⁾。その結果、約 100 年

前に始まった 1 世代目の試験地は全国 10 カ所で実施されたことが分かりました（図 2）。そして、その一部の試験地は途中で消滅したり場所が不明になってしまったものの、7 カ所の試験地では発芽からおおよそ 67 年目にあたる 1997 年前後に千葉演習林の試験地と同様に開花したことが分かりました。さらに、2 世代目にあたる実生は植物園等へ移植されるなど、さらに植栽場所を増やし、現在も竹林として維持されていることが分かりました。いくつかの試験地では千葉演習林と同じように試験地の由来を記した石碑や看板も現存していました。

本調査の結果、全国各地で 2 世代目のモウソウチクが今も生存していることが確認できました。これらの竹林は、100 年前から続く研究のバトンを次世代へと繋ぐ貴重な存在です。これからも各地で維持されていくことが期待されます。

なお、今回ご紹介した 67 年という開花周期は特定の实生由来の系統に関するものであり、モウソウチク全般に当てはまるものではありません。全国に広く分布するモウソウチクは日本に移入されて 300 年近く経過していますがまだ大規模な一斉開花は起こっていませんので、今後も注視していく必要があるでしょう。

引用文献

- 1) 小林慧人・西山典秀・杉本恵里子・柏木治次・若山太郎・久本洋子（2024）「三百年計画、竹の開花年限に関する実験」の過去から現在まで：実生起源のモウソウチクにおける長期植栽試験の実態。森林総合研究所研究報告，23：135-151。



図 1 千葉演習林モウソウチク開花周期実証試験地。a：試験地の中に設置された石標の表面。b：裏面には試験内容が刻まれている。c：1997 年開花の様子（写真は千葉演習林所蔵）。d：2024 年現在の様子。



図 2 モウソウチク実生の栽培状況。略称は次のとおり。郷台、札郷：東京大学千葉演習林、田無：東京大学田無演習林、筑波：森林総合研究所つくば本所、若山：若山農場、塩野室：栃木県林業センター、赤沼：森林総合研究所赤沼実験林、多摩：森林総合研究所多摩森林科学園、上賀茂：京都大学上賀茂試験地、柏屋：現・九州大学福岡演習林、富士：富士竹類植物園。小林ら（2024）を一部改変。

森林生態系多様性基礎調査から明かす全国規模の森林炭素蓄積能力の実態

森林圏生物機能生態学研究室 北海道演習林 仲畑了

森林の炭素蓄積能力を正確に推定することは、カーボンニュートラルの実現に向けた重要な課題の一つです。林野庁が管轄する森林生態系多様性基礎調査 (NFI: National Forest Inventory) は、日本の森林資源量を把握する上で重要なデータを提供します。特に、直近の第3期(2009～2013年実施)と第4期(2014～2018年実施)のデータを用いることで、年間の森林炭素固定量を正しく評価することが可能となります。

全国スギ林を対象とした新たな森林炭素蓄積モデルの構築

森林炭素蓄積量を将来にわたり予測するためには、林齢にともなう森林成長パターンを知る必要があります。しかし、過去の収穫表データは時代遅れとなりつつあり、特に不確実性の高い高齢林の成長を予測できる新しいモデルが必要とされています。

森林資源や木材産業の観点からスギ林は最も重要な森林タイプです。私たちの研究では、NFI データに加え、大学演習林の資料を含めた既往文献調査 (LS: Literature survey) を行い、高齢林をカバーする正確なスギ林成長モデルを推定しました¹⁾。また、このモデルを用いて、複数の森林管理シナリオに基づく将来のスギ林総炭素蓄積量を予測しました。

新たな成長モデル (NFI-LS モデル) では、スギ林の最大炭素蓄積能力が $247.1 \text{ MgC ha}^{-1}$ となり、旧来の収穫表に基づくモデル (YT モ

デル) の値 $135.5 \text{ MgC ha}^{-1}$ に比べ 1.8 倍も高くなりました (図 1)。新しい成長モデルを用いた予測によると、日本のスギ林は未だに膨大な炭素資源を蓄える能力があり、2100 年までに最大で 1000 TgC 以上もの炭素を蓄積できる可能性があります。

全国森林の炭素蓄積量・炭素固定能力の実態解明

日本全国の森林による総炭素固定量の推定値は、二酸化炭素 (CO_2) 排出削減目標の策定等において重要な指標となります。私たちは、あらゆる森林タイプにおける炭素固定能力を第3期・第4期 NFI データを用いて評価しました²⁾。

年間の総炭素固定量はすべての森林タイプを含めて 46.2 TgC yr^{-1} ²⁾ であることがわかりました (図 2)。この数値は、旧来の収穫表に基づく推定値の約 2 倍に相当します。特に、スギ林は面積あたりの炭素固定速度が最も高く、森林による年間総炭素固定量の 43.1% を担っています。また、機械学習アルゴリズムを用いた詳細な解析 (SHAP 値) では、森林タイプが炭素固定能力に対して強く影響することがわかりました。

日本政府は 2050 年までのカーボンニュートラル実現を目指しています。現在、森林による年間炭素固定量は CO_2 換算で約 5000 万トンと見積もられています³⁾。しかし、私たちの研究では、年間炭素固定量は少なく見積もっても約 1 億 2700 万トンとい

う異なる実態を示し、これまでの公的な推定値を大幅に上方修正する必要性を示唆しています。これらの知見が環境政策や森林管理に活用され、カーボンニュートラルの実現に向けて日本の森林が持つ潜在能力が最大限に発揮されることを期待しています。

*1 MgC ha^{-1} : 森林 1 ha あたりの炭素 (C) の蓄積量 (Mg: メガグラム)

*2 TgC yr^{-1} : 1 年 (yr) あたりの炭素 (C) の固定量 (Tg: テラグラム)

引用文献

- 1) Nakahata, R., Egusa, T., Kumagai, T. (2025) Current and future carbon stocks of a dominant forest plantation species, *Cryptomeria japonica*, throughout Japan. *Journal of Environmental Management*, 393, 126981.
- 2) Kumagai, T., Nakahata, R., Kameyama, T., Egusa, T. (2026) Revised estimates of forest carbon sequestration reveal the true sink capacity of Japanese forests. SSRN, <http://dx.doi.org/10.2139/ssrn.6090126>.
- 3) 研究開発戦略センター (2022) 調査報告書: バイオマスを CO_2 吸収源としたネガティブエミッション技術 (CRDS-FY2021-RR-05). 科学技術振興機構, 東京.

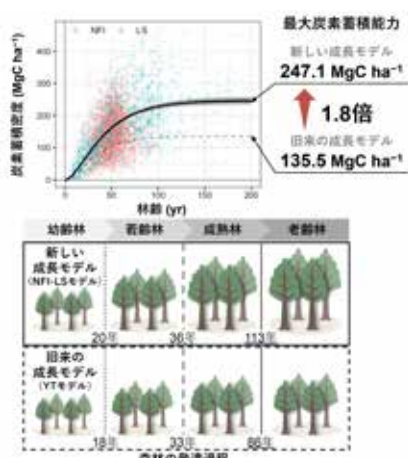


図 1 スギ林における林齢と炭素蓄積密度の関係 (上図) と森林発達過程の模式図 (下図)。(上図) 赤点は NFI、青点は LS 由来のデータを示す。実線は新たなモデル (NFI-LS モデル)、破線は旧来のモデル (YT モデル) である。実線の影は 95% 信用区間を示す。(下図) 発達過程における各段階の林齢は各成長モデルに基づいて計算した。Nakahata et al. (2025) の図を一部改変。

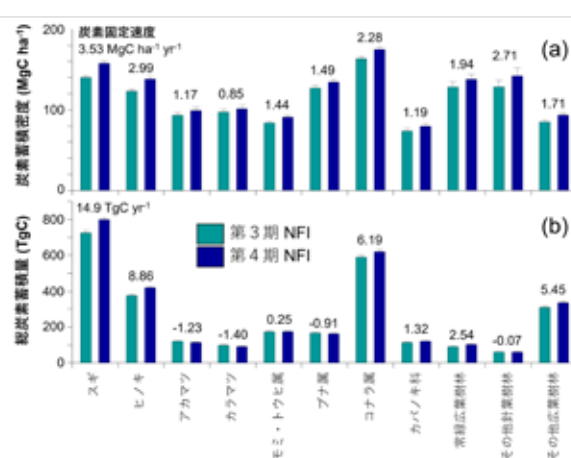


図 2 第3期・第4期 NFI データに基づく森林タイプ別の (a) 炭素蓄積密度と (b) 総炭素蓄積量。エラーバーは 95% 信頼区間を示す。各棒グラフ上部の数値は年間の炭素固定速度を表す。Kumagai et al. (2026) の図を一部改変。

スロベニア共和国との国際共同研究の 成果報告会が開催されました

北海道演習林では、2024年1月からスロベニアのリュブリャナ大学の研究者とともに、農林水産技術会議の二国間国際共同研究事業の一つである課題「デジタル技術と3次元空間情報を活用した近自然型林業の計画・管理システム構築と実証」に取り組んでまいりました。2025年10月23～24日に林野庁北海道森林管理局20名、11月5～6日に北海道有林33名の職員の皆様に北海道演習林にお招きし、その成果報告会を行いました。

報告会では、航空機やUAVによるLiDAR測量、ドローン空撮、高精度衛星測位システムなど、最新技術を活用した森林管理の事例を紹介し、実際の森林で機器を体験し、現場での課題や活用の可能性について活発な意見交換が行われました。多くの質問や提案が寄せられ、デジタル技術を取り入れた林業の未来に期待が高



UAVがとらえた映像を現場でモニターで写し解説中

まっていることを再認識しました。今後も、デジタル技術と3次元空間情報を活用した近自然型林業の実践と普及に向けた取り組みを進めてまいります。

地域協定に基づく公開講座「温泉と カカオ豆から作るチョコレート体験」

2026年2月14日、樹芸研究所大温室にて公開講座「温泉とカカオ豆から作るチョコレート体験」が開催され、地元の南伊豆町の小学生と保護者9組21名が参加しました。これはGX(グリーン・トランスフォーメーション)でも協力し合うために昨年度に再締結した南伊豆町との協定に基づくもので、今回が初めての開催となります。

公開講座では子どもたちにカカオ豆からチョコレートを作ってもらいました。カカオ豆を発酵させる必要があることや人力で滑らかにすり潰すことの難しさを学ぶとともに、温泉を熱源とする温室で育ったカカオの実の収穫や、温泉での湯煎など、地域の自然資源の活用例を体験してもらいました。これらの体験を通して、子どもたちにはチョコレートという身近なお菓子の本当の姿とともに、地域資源の可能性についても感じてもらえたのではないかと思います。樹芸研究所では今後もGXの視点からさまざまな地域協力を目指していきます。



温泉を使った湯煎でテンパリング

韓国・ソウル国立大学校での 国際シンポジウムの合同開催

2025年10月27～28日、韓国のソウル国立大学校で「第2回アジア森林GX/DX国際シンポジウム」兼「第10回アジア大学演習林コンソーシアムシンポジウム」が開催され、アジア9大学から教職員や学生など計90名が参加しました。

初日の福田フォレストGX/DX協創センター(FGDC)長による基調講演では、FGDC設立以降の主な活動内容が紹介されました。招待講演やパラレルセッション、ポスターセッションで各国の最新の研究成果が共有され、活発な議論と国際交流を通じて、森林を基盤とするGX・DXの新たな展開について理解を深める貴重な機会となりました。

10月29日から2日間は、ソウル国立大学校の南部演習林、順天湾国家庭園へのエクスカージョンが行われました。



福田FGDCセンター長による基調講演

参加大学
東京大学、国立台湾大学、海南大学(中国)、マレーシアサバ大学、カセサート大学(タイ)、ガジャマダ大学(インドネシア)、フィリピン大学、ベトナム国立林業大学、ソウル国立大学校

北海道演習林の森づくりと木材生産の取り組みを紹介する英文書籍を刊行しました

北海道演習林が、木材生産と生態系の保全の調和を目指して60年以上にわたり実践してきた天然林の管理手法「林分施業法」の歴史、手法、課題をまとめた書籍がSpringer社から刊行されました。

「林分施業法」の解説を軸にして、北方森林生態系の特徴や森林管理の歴史、台風や虫害などの自然撓乱への対応、近年進められているデジタル技術の導入(DX)、今後の森林管理の課題までを幅広く紹介しています。

「林分施業法」の六つの基本原則、伐採木を1本ずつ選ぶ選木、天然更新を補助する作業、高品質な苗木生産など、具体的な技術とその意義が説明されています。さらに、北海道演習林に生息する多様な生物とその保全活動、炭素貯留や水資源の供給、文化的価値といった森林の多面的機能(生態系サービス)にも焦点を当てています。

研究者・技術者・行政担当者はもちろん、持続可能な森林管理に関心をもつすべての方へ向けた一冊で、未来の森づくりを展望する内容となっています。



Integrative Forest Management and Silviculture: Harmonizing Conservation and Production は無料でダウンロードできます

演習林のデータを使った研究が高校生・高専生科学技術チャレンジ (JSEC2025) で優秀賞を獲得

2025年12月13・14日に日本科学未来館にて行われた第23回高校生・高専生科学技術チャレンジ (JSEC2025) 最終審査会で、名古屋経済大学市邨高校^{いちむら}3年生・^{こうけつれい} 瀧澤玲悟さんの研究が優秀賞を獲得しました。

JSEC2025は全国の高校生・高専生による科学・数学・技術に関する自由研究の発表と表彰を通じて理数系人材の育成を図る研究大会で、瀧澤さんの研究タイトルは「森林遷移と炭素固定量の関係～適切な時期の切り置き間伐で地球温暖化を緩和できるか～」でした。生態水文学研究所犬山研究林では2020年から高校生たち延べ150名が毎年測定してきた毎木調査のデータがあります。本研究は、このデータと環境省モニタリングサイト1000で公開されている生態水文学研究所赤津研究林、秩父演習林などのデータから、森林の炭素固定量が遷移後期で減少することを示し、遷移が中期から後期に移る前に切り置き間伐を行うことでより効果的に地球温暖化抑制に資するという内容でした。



賞状を授与される瀧澤さん

しおじの会主催「冬芽の観察とクリスマスリース作り」

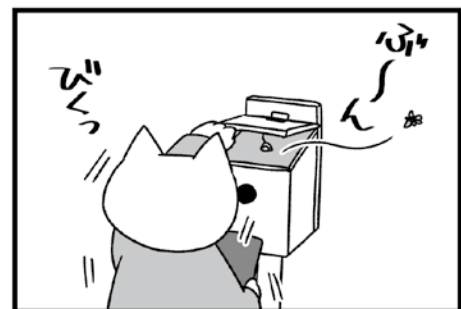
秩父演習林では2004年よりボランティア組織「しおじの会」(以下、本会)が活動しています。本会は、秩父演習林の社会貢献活動に協力するとともに、歩道の整備といった日常業務もサポートすることを目的として設立されました。2026年1月現在で26名の会員が在籍しています。主な活動は、秩父演習林が募集する「演習林ボランティア活動」への参加と、本会が自主的に行う「しおじの会運営活動」の運営があります。

2024年度からは、本会主催の公開事業として「冬芽の観察とクリスマスリース作り」を秩父演習林影森苗畑で開催しています。2025年度は12月6日に開催し、9名の方が参加しました。当日は、苗畑に植栽されているピンオーク(アメリカガシワ)やムクロジの冬芽、ストロブマツの球果などを観察しました。また、マメガキやケンボナシを食べて甘さを体感しました。最後に、自然の材料を使用してリースを作製しました。



完成したクリスマスリース

演習林のおしごと 021



千葉県鴨川市との交流事業「野鳥の巣箱をかけよう!」を千葉演習林で開催

千葉演習林では2025年12月6日に、鴨川市との交流事業「野鳥の巣箱をかけよう!」を開催しました。本事業は、鴨川市内在住の小学生親子を対象として開催しています。前身となる事業が開始されてから20年以上経ちますが、今年は定員の2倍を超える応募があり、根強い人気ぶりが伺えました。

当日は、抽選の結果選ばれた8組の参加者が、演習林職員のレクチャーを受けながら千葉演習林産のスギの板から巣箱を作製し、でき上がった巣箱を敷地内に設置しました。



作製した巣箱を設置「春にヒナが観察できるといいな!!」

参加した小学生からは「木を切ったり、釘を打ったりして楽しかった」「巣箱を作る作業は大変だったけど、面白かった」、保護者の方からは「普段扱うことのない工具を子ども達に使わせることができ良い経験になった」などの声が聞かれました。

今回設置した巣箱は、2026年4月11日に観察会を開催し、営巣しているか中の様子を観察する予定です。



投稿企画
morikara川柳



芝刈り機 気分は一流 ドライバー

山枯れ木 感謝を込めて 薪にする

ホケキヨと 自信たっぷり 春浅し



morikara では、みなさんが作った演習林に
まつわる川柳を募集しています。
右の QR コードからご投稿ください。



表紙写真：シダの群生（田無演習林）

地方演習林

- 千葉演習林
- 秩父演習林
- 生態水文学研究所
- 樹芸研究所
- 北海道演習林
- 田無演習林
- 富士癒しの森研究所

研究室

- 森林圏生物機能生態学研究室
- 森林流域社会環境学研究室

センター・企画部

- フォレスト GX/DX 協創センター
- 企画部

東京大学演習林には七つの地方演習林、センター・企画部、二つの研究室があります。

東京大学演習林

